

アンナ・ルイーザ・カルシュの神話化と脱神話化

佐藤正樹

1761年1月、フォン・コトヴィツ男爵の尽力でシュレージエンからベルリンに出たアンナ・ルイーザ・カルシュ（1722-1791年）は、名士たちのなかに知己を得、人気作家としてますます盛名を馳せた。グラウムとのあいだに1200通をはるかに超える文通が始まるのもこの年である。そして1763年8月11日のフリードリヒ大王との謁見は評判になった。サン・スーシでの短いやりとりの最後に王はカルシュに年金を約束した。10月下旬には、18世紀全体をとおして一冊の書物として最高の売上高を記録することとなる『精選詩集』が出版される¹⁾。カルシュは人生の頂点を迎えていた。

カルシュは多くの自伝詩を残したが、生活史全体を回顧するある程度まとまった記録としては、1761年以降に書かれた6種類の自伝ないし伝記がある。(1)『精選詩集』の序文を担当するズルツァーの依頼を受けてしたためた、おそらく18世紀自伝文学の傑作と称すべき4通の自伝書簡（1761-1762年）、(2)ズルツァーの『精選詩集』序文、(3)その出版と相前後して書かれたと推定される46行の自伝詩「ペロイーゼの履歴」、(4)自伝「詩人アンナ・ルイーザ・カルシュ、旧姓デュルバハ伝草稿」（1789年執筆）、(5)ザームエル・パウア（1768-1832年）の『ドイツの女性作家』（1790年）中のカルシュ伝、(6)娘カロリーネ・フォン・クレンケ（1750/51-1803年）の編纂になる母の遺作詩集（1792年）の巻頭におかれた「詩人アンナ・ルイーザ・カルシン、旧姓デュルバハの履歴に関する予備知識」がそれである。

娘カロリーネは「ペロイーゼの履歴 Belloisens Lebenslauf」²⁾を『詩集』に採録するにあたり、「これは詩人の履歴の素描ゆえここに収める」とわざわざ注記しているが、うるわしいルイーゼ (belle + Louise) がカルシュ自身を指すのは明らかである。カルシュは今まさに人生の頂点にあることを自覚し、苦難の前半生を手短かに回顧する。この詩はあの4通のズルツァー宛て自伝書簡の、いわば要約版でもある。だが、切りつめた回顧であれば、なおさらカルシュ本人にとって格別に重要な意味をもつ生活体験だけが厳選されているであろう。

私は生まれたとき、教区の晴れがましい
招待客もなく、司祭の祈願も受けられずに、
わらぶき小屋で
はじめてこの世の光を見てより、
小羊や鳩、
山羊を相手に五歳まで成長し、
一人の造物主の存在を信じることを学んだ。

朝焼けは心地よく、森はどこまでも青々と、
野辺は色とりどりに染まり、小川は
澄んで銀のように美しかったのだから。
ひばりがペロイーゼのために歌うと、
ペロイーゼもひばりのあとについて歌った。
小夜啼鳥がハンノキのしげみで
甘い歌声を聞かせてくれると、私は

早くもその調べと競いあいたいと思った。
そんな私を伯父は見て、
ついて来なさいと言った。
向こうへ着くとすぐ伯父から、
私たちの心を天まで引き上げてくれる
本を読み、理解することを学んだ。
四度の夏と四度の冬が私たちのかたわらを
羽がはえたように飛び去った。
伯父の腕から引き離された私は
生まれてまもない弟のゆり籠の横に立った。
その大きな弟を背負って、
三頭の牛を野に追い、
牧童の歳月を過ごしながら
心ゆくまで自然の美しさを称えたものだ。
けれども幼くして婚姻のくびきにつなわれ、
つづけて二度もその重荷に耐えたのだが、

うれしいときも苦渋のときも
その慈しみを、生まれる前から
感じる者に寄り添ってくださる
詩神がおられなかったら、
奮起することはおぼつかなかっただろう。
詩神は私に勇気と忍耐とを授け、
おさな子たちを膝にのせて
歌をつくるすべを教えてくれた。
妻、下女、母としての務めを果たし、
辛く重い苦悩にさいなまれながら、
私は王のために、そして、
王とその勇士の群れに
不滅の緑の冠を授けた戦のために歌った。
そうして、艱難辛苦の幾歳月の果てに
ようやく他の重荷から解き放たれて、
わが人生の日々は歌となった。

俗語と洗練された語彙、一人称と三人称とが混在する、いくぶん推敲の行き届かぬ作品ながら、厳選された素材を配列した韻文の履歴書である。啓蒙のプログラムから落ちこぼれ、大伯父から読み書きを教わる以外は、ただ自然をのみ教師として詩作を試みる。牛追いと子守の生活からやがて幼妻となり、離婚と再婚を経てベルリンに出、ついに「フリードリヒの詩人」となるにいたった半生の歴史——極貧の境遇から身を起こし、ついに評判の詩人となった奇蹟の、当然のことながら誇らしい記録である。

だがここには、いわゆる生活史の「事実」とはいえないことがらも書き込まれている。小羊や鳩は「牧歌」の伝統的なモチーフであり³⁾、ひばりと小夜啼鳥が歌の師匠だったというのは、陳腐だが重要な意味をもつレトリックである。周囲の美しい自然もそのままシュレーゲンの寒村の風景だとはいえない。二度の結婚生活の「くびき」を経てなお詩才をはぐくみえたのは、「生まれる前から」詩神の存在を感じ、それをよしとした詩神が「勇気と忍耐とを授け」、「歌をつくるすべを教えてくれた」からだと言語にいたって、主人公はほとんど伝説中の人となる。ここにバロックの「楽園」の残照を見出すのは困難なことではない⁴⁾。

ギリシア神話の詩神（ムーサイ）は、この時代、古代ギリシアを離れ、ほとんど詩歌そのものか、詩才あるいは詩的着想の意味に用いられた流行語である。アンナは自然を教師として詩人になった。自然は神の創造のたまものであり、自然の背後には神がおられる。アンナの「教育」には神慮がはたらいていたのだ。しかもその神慮が誕生以前からすでに定められていたとすれば、アンナは自然が生んだ「天才」「神童」ではないか。

カルシュ自身も、自分が自然の子であり、自然から詩才をもらった自然の寵児であることを、くりかえし歌い、かつ語った。たとえば大王を謁見したとき、まともな教育を受けなかった者

がなにゆえ詩人となりえたのかと問う国王に、「自然のおかげです。それと、陛下のあまたの勝利のおかげでございます」と答えている⁵⁾。また、天使の一人が誕生もないアンナを見て、「わが導きの庇護のもとにお預けいただきたい」と神に願い出ると、神はそれを許し、ムーサイの一人と豎琴をアンナの手にゆだねられた、その豎琴のおかげで「英雄フリードリヒをたたえる晴れやかな讃歌を奏で」ることができるのだと歌った詩もある⁶⁾。

しかし、カルシュが18世紀に生きる一人の女だという事実には変わりはない。自伝書簡に書かれているとおり、母も祖母もアンナがラテン語まで解することを好まなかった。勉強をしすぎると「頭が変になりはしないか」と母は心配した。やがて結婚するが、シュレージエンがプロイセンに併合され、この地にプロイセン法が導入されたため、裁判所の評定にいたる屈辱的な扱いはともあれ、カルシュはシュレージエンで最初の離婚婦人となった⁷⁾。不本意というほどの明確な自覚もないまま、母の命令で再婚したのは、所帯をもち、主婦となり母となることが女性一般のあたりまえの夢であった時代には、むしろ幸運なめぐりあわせだった。カルシュはたしかに二人の横暴な夫のもとで「妻、下女、母」としての務めを果たしたが⁸⁾、妻と主婦と母は女の義務ないし天職だと考えられ、あたりまえの生き方であった。だが、「詩人」は女としては想定外の「職業」であり、継父が本を取り上げ、夫が妻の詩作に無理解だったとしても、それ自体を暴挙だと決めつけるわけにはいかない。

この「閲歴」には、このように、納得のいく「事実」「現実」と、いわば「神話」ないし「伝説」が、区別なく、しかし実は周到な計算のうでで混在させられている。この悲惨な「現実」を突破して「詩人」となる飛躍を可能にするものこそ、この「神話」であり「伝説」であったからだ。それは、カルシュが「自然の子」であることと、「生まれる前から」詩神の恵みにあずかっていたことの二点に要約される。ここには、神-自然-天才という連想がはたらいっている。

ところで、このバロック風の「楽園」では、美しい朝焼けや野と森と小川が、さながら舞台の書割のように配置され、頭上には神とムーサイがおられる。舞台上でアンナと族長のごとき大伯父がことばを交わし、鳥がアンナに歌を教える。「小羊」「山羊」「牛」は遊び相手であり、生活の糧を授けてくれる家畜でもある。そしてこの「楽園」の平和を乱すものが、貧乏生活と二度の結婚生活、そして言外に暗示される再婚した母と継父、子守をさせられた種違いの弟、そして粗野な二人の夫である。バロック風の「楽園」と18世紀の無名の人々の暮らしの対比が、この詩のもう一つの特徴である。

しかし「楽園」の牧童はもう一人いた。ズルツァーに宛てた自伝書簡の第一、そのなかでも別して美しい場面の一つ、大伯父のもとから帰郷し、牧童生活が始まるくだりに注目したい。

朝早く、太陽がまだ夜露を飲んでいないうちから、やりくりじょうずな祖母が三頭の雌牛の乳を搾ると、わたしはその牛を追っていった。頭上でひばりが息の長い歌をつづけるたびに満足感をおぼえ、誇らしく思った。わたしは夏のありったけの快適さを味わい、ときには聖書の物語に似た短いお話をつくった。砂の塔を築き、石をまわりに並べ、木の弾でそれを壊した。

右手の杖で指図し、ひとりごとを言いながらわたしは軍隊の大将になっていた。アザミは全部敵。兵士の勇気をふるってアザミの頭をかたっぱしから斬り落とした。ダヴィデとマカベア一族の業績が手本だった。彼らのように勝利を取めるのが愉快だった。大切ないくさのあとのある秋の日のこと、小川のほとりにすわっていると、川向こうに数人の牧童が一人の少年を取り囲んでいるのが見えた。その子が朗読をしているのだった。わたしは聴衆を増やすために飛んで行った。なんというしあわせであったことか。つぎの日からわたしはわざわざ回り道をして、流れのいちばん浅いところを渡って牛を追い、それはそれは長いこと身近になくて寂しい思いをしていた願望、本を、また見つけたのだった。⁹⁾

本を貸してくれた牧童は大伯父につく恩人である。カルシュはグライムの姪ゾフィー・ドロテアに宛てた手紙に、少年の人相や声、信心深かった人がらまでくわしく書いている¹⁰⁾。カルシュの最初期の詩のいくつかはこの牧童に贈られた。カルシュ自身もそのことを忘れていたが、牧童はそれらの詩を大事に保管し、後年カルシュに提供した¹¹⁾。彼は戦争で零落し、細工物をこしらえてなんとか露命をつないだが、貧窮に甘んじた。カルシュがかつての牧童を支援するためベルリンから送金したのは¹²⁾、少女時代に受けた恩を忘れていなかったからである。識字能力をもつ稀有な牧童から借りた本によって、大伯父のもとで身につけた能力は維持発展させられたはずだ。「楽園」における牧童との出会いが「閲歴」からもれたのはなぜか、残念ながらその根拠はどこにも語られていない。しかし浅瀬を渡る牛の躍動感と水しぶきのみずみずしさ、川向こうの牧童の群れ、そして文化を非文化から分かつ重要な指標である本のある風景は、カルシュ伝のもっとも感動的な場面の一つである。川は、牛追いと子守を日課とするはしためのごとき暮らしと啓蒙の時代を生きはじめた人々の新しい「文化」とを隔てる境界線であると同時に、わずかな浅瀬を渡れば難なくそこに到達しうることを教えている。

この自伝書簡を参考にしてまとめられたズルツァーの『精選詩集』序文になると、牧童との出会いは、そっけなく、しかし「現実」のできごととして理解できるように書かれている。

ふたたび母親のもとに戻された。まず種違いの弟の子守をしなければならなかった。そのあとすぐ両親の家畜のすべてである三頭の子牛の世話をするしごとを与えられた。その直前から文藝への自然な愛着の最初の痕跡が現れた。異常なほど歌う喜びを感じ、百篇もの讃美歌をそらんじ、労働のとき、小さな家畜の群れの番をするとき、それらを口ずさんだ。そのためどのような歌であったかもう記憶していないが、自分も朝の歌をつくりたいという願望がきざした。

牛追いの暮らしの合間に、生来の天才を助けてくれるもう一つのきっかけが現れた。知り合った牧童が小川と家畜の群れに隔てられながらも数冊の本を届けてくれたのである。[……] 若い牛追いの娘はそれらをむさばるように読んだ。そのおかげで牧童の暮らしは快適になった。¹³⁾

ザームエル・パウア（1790年）がこの記事をそのまま利用しているのは明らかである。

[……] それからまもなく、三人の子どもと両親の家畜の世話を任された。その直前から文藝への自然な愛着の最初のきざしが現れた。異常なほど歌の喜びを感じ、百篇もの讚美歌をそらんじ、労働のとき、小さな家畜の群れの番をするときそれらを口ずさんだ。そうこうするうちに、自分も朝の歌をつくりたいという願望がきざした。牛追いの暮らしの合間に、生来の天才を助けてくれるもう一つのきっかけが現れた。知り合った牧童が、小川と家畜の群れに隔てられながらも数冊の本を届けてくれたのである。¹⁴⁾

カルシュの項目についていえば、パウアは冒頭からズルツァーを無断で引いているのだが、とまれ、詩人は「教育と規則」によってはつくりだされず、「その召命と能力とを自然からのみ受け取る」、それゆえ、自然のたまものである「想像力の灼熱」のまにまに詩を書くカルシュこそ、自然が生んだ天才詩人のまぎれもない実例だ、という主張は両者に共通する。

カルシュはズルツァーの序文が不満だったらしく、序文を書く約束を果たさなかったとグライムに恨み言を書いている¹⁵⁾。カルシュはいつか自伝を書き直したいと考えていたのではないか。事実、1789年執筆と推定される「詩人アンナ・ルイーザ・カルシュ、旧姓デュルバハ伝草稿」では、牧童との出会いのエピソードに重大な変更が加えられた。

[……] 小川が畑と野菜畑のあいだをくねくねと伸びていた。あるとき牛飼いの娘が小川にかかる木橋に腰をかけていると、向こう岸に一人の牧童がいた。少年は輪になっている牛たちに本を読んで聞かせている。牛飼いの娘はあつという間に輪に加わり、熱心に耳を傾けた。翌日も岸に沿ってずうっと牛を追っていき、小川が小石の上をさらさらと流れるあたりまで行った。ここなら楽に向こうへ渡ることができた。この秋ほどすばらしい秋を味わったことはなかった。¹⁶⁾

アンナは木橋に腰をかけていた。ふと見れば川向こうで少年が朗読をしている——牛を相手に。さても啓蒙のプログラムは家畜にまで及んだか、などというのはひねくれた読み方である。つぶらな目をした牛たちが神妙に輪をつくり、殊勝にも朗読に耳を傾けている。少年少女向けの絵入り読本のごとき趣向である。朗読に耳を傾ける動物——聖人伝の一こまにでもありそうなこのモチーフはカルシュ伝の神話化、伝説化をうながすであろう。

娘カロリーネ・フォン・クレンケも神話化に一役買った。母の遺作を集めた『カルシュ詩集』の冒頭に、作家でもあったカロリーネの最高傑作だと皮肉な批評も聞かれる、126ページに及ぶ母の伝記がおかれている。長い歳月とともに過ごした身内の証言ならば、傾聴に値する。

しかし、大王の後継フリードリヒ・ヴィルヘルム二世から贈られたベルリン市内の新築家屋に娘と同居を始めて以来、とくに目立つようになった親子の確執は壮絶なものであった。娘は悪態をつき、暴れ、母にこぶしをあげた。父が軍隊に入れられたまま打ち捨てられていること、

自分が寄宿学校に入れられたこと、自身の結婚生活の破綻、なにもかもが母のせいと思われた。娘から侮辱を受けたと感じた母は、思いあまって、長文の、告訴状のごとき「遺言」をしたためる。1788年のことである¹⁷⁾。1791年、ついに母は下賜された家を出、フランクフルト・アン・デア・オーダーで法律を学んでいた孫ハインリヒ・ヴィルヘルム・ヘンペルのもとに身を寄せるが、故郷シュレージエンの再訪はかなわなかった。10月1日、カルシュは危篤状態でベルリンの自宅に戻され、それからわずか十日あまりで息を引き取った。市内で夫と薬屋をしていた旧友ヨハンナ・ルイーゼ・レーベルトは死の床にカルシュを訪ね、娘との和解を切に勧め、かたくなな娘をも、母上を見舞うようしんぼう強く説得した。ようやく娘は母を訪ねる。

クレンケ夫人が部屋に入ってこられますと、お母上は泣きながら手を差し出されました。お母上のほうが娘さんよりも先に手を伸ばさねばならなかったのです。[……] このお二人がたがいに過ごしてこられた人生は、まことに嘆かわしいものでした。¹⁸⁾

翌年出版された『詩集』のカルシュ伝はまず、あの4通の自伝書簡を引用するかのようになり、母の醜い容貌から説き起こす。それはたしかに母が生前からくりかえし語っていたことである。しかし、と娘はことばを続ける。

しかし、ぜひともここに書いておきたいことがある。詩人はその後けっして醜く育ったわけではなく、また、もしも身体と表情とをうまく操るすべを心得ていたなら、死ぬまで美人でとおっただろうと思われることだ。母は中背の、均整のとれた上品な立ち姿をしており、美しい、ずっと変わらない顔色で、淡い褐色の髪と、これ以上は望めないほど美しい、いかにも人間らしい額をもち、そこにはまさしく偉大な精神の光が宿っていた。輝きにみち、ひじょうに明るく雄弁な目、つねに赤い唇、上機嫌のときには表情に心から陽気な気分があふれていた。しかし、たいいていその顔を支配していた眼光にさらされると、ひとは耐えがたい印象を受けた。しばしばある瞬間に気が散ることもあるが、それでも思考やふるまいが逸れないときの母を相手にするのは難儀なことであっただろう。¹⁹⁾

晩年における娘との壮絶な戦いを念頭において読めば、このカルシュ伝は、ようやく怨恨感情から解放された娘から亡き母に宛てた詫び状か供養のようにも感じられる。事実この伝記は4通の自伝書簡よりもはるかに文飾豊かにまとめられている。おそらくは母からもじかに取材した記録にカロリーネの空想が加わったためであろう、少なくとも伝記の前半は目撃談カルポルタージュのように、また、ときには小説か夢物語のように、みずみずしい感性で、いきいきと叙述されている。牧童との邂逅の場面もそうだ。

そのささやかな家畜を追ってはじめて草の多い牧場に足を踏み入れたとき、彼女は13歳であった。ここでかつてないほど想念が激しく動くのを感じたが、やりかたさえ知っていたら、それらを絵にしたことであろう。読むべき本もなければ書く道具もなく、思いを告げうる相手もない

かった。こうして彼女は子牛と時間を過ごしながら、ただ空想をもてあそぶばかりであった。しかしある日、感傷的な夢にふけていると、突然一頭の牛が逃げ出した。牛は別の牧場との境界をなしている濠をやみくもに渡りはじめた。不安にかられて幼い牧童は濠に入り牛のあとを追った。ほかの二頭は自然にあとからついてきた。彼女はかなりの距離を走ってようやく牛に追いついた。さて、少し休もうとしてあたりを見回してみると、そこはまったく別の牧場であった。そしてやや離れたところに牧童がいるのに気づいた。少年は木の下にすわり——ああ、すばらしい幸運であったが、本を読んでいたのである。うれしくて胸が高鳴った。思うが早いか少年のそばに立っていた。ごく短いことばをふた言三言交わしただけで終生の友になっていた。そして本好きがたちまち二人の心を友情のきずなで結びつけていた。たといこの瞬間にユピテルのごとき神が天から舞いおり、彼女の子牛の一頭にすがたを変えたとしても、詩人はそれに気づかなかったであろう。若い牧童が読んでいた本にそれほど気持ちが執着していたのである。²⁰⁾

自然児は牛の導きによって文明に遭遇する。川は野生と文明の両世界を隔て、かつ結ぶ。牧童相手の朗読は牛たちへの朗読に変化し、それはさらに神の使いとしての牛による本のある楽園へのいざないに、いわば「進化」する。むろんカロリーネは意図してそう読ませようとしている。この場面は、事実の記録としてまずまず容認しうる段階からしだいに寓話化し、ついには濃密なバロック風「楽園」の意匠をこらした「神話」と化する。

カルシュ現象をいわば神話化しようとする意図が、カルシュ自身にもまた周辺にもあったことは、この名高い場面の変容を一瞥しただけでも明らかである。ズルツァーはカルシュをはじめ知った直後、ボードマーにカルシュを「奇蹟的現象」として紹介し、「自然のみが形づくった詩人、ムーサイの教えだけを受け、偉大な事業を約束する詩人」だと書き送った²¹⁾。カルシュ自身も、「天賦の才能が手に王笏をもってわたしの魂のなかに座し、思想の飛躍を導いてくれる」と書いている²²⁾。ヴィーラントでさえ「この尋常ならざる自然の娘とその奇蹟的な才能」に敬意を表したのだった²³⁾。

グライムとならんでカルシュの「自然」と「天才」とをもっとも熱心に喧伝したのはズルツァーだった。『精選詩集』序文は、自然から召命と能力とを授からなくても、規則と教育が補ってくれるかという、そうはいかないのだと述べる。「意図もなければ技術も教育も」ないカルシュが「最上の詩人の仲間入りを果たすのをわたしたちは目撃する。自然が感激をとおしていかに作用するか、それなくしては意図も努力もいかに自然の欠落を埋めるすべがないか、この詩人をみてわたしたちはその事実には驚きを禁じえない」。では、カルシュが詩人としての召命を自然からのみ授かったと断言しうる根拠はどこにあるのか。当人の境遇にあるのだという。

なぜならそこには、自然をもって生まれた素質以外に、文藝への衝動を人工的に彼女のなかに作り出せる要因が何も見出せないからである。この詩人の場合、学習によって獲得した規則が天才の代役を務めうることを納得させられるような状況が何一つ存在しない。この詩人はどん底と紙一重の境涯に生まれ、その教育も、子ども時代と青春時代のはじめに与えられたしごとも、

卑しい出自に見合うものであった。しかし長じてなおその暮らし向きは、自然のほうが彼女の遭遇するあらゆる障害よりもはるかに強力でなかったら、かならずや精神をもっとも深い泥にまみれさせたであろうたぐいのものであった。²⁴⁾

天才は規則ではつukれないという主張は、のちに『文藝の一般理論』（1771-1774年）でさらに展開され、理論化される。天才は何から生まれるのか、それはまだつきとめられていないが、「その最初の根拠を与えるのはどうやら自然である」。「真の天才の作品は自然の刻印そのもの」である。高い靈感は藝術家に感動として現れる。そのとき、もっともすぐれた思想と形が、わざわざ探さなくても流れ込んでくる。ただし、最大の成功を収めるのは「悟性と天才とをもちあわせる藝術家」である。「空想の美しさ、悟性の完璧、道徳的偉大さなど、繊細な感情が完全に欠落していると、もはや教育によっても練習によってもこれを補うことはできない²⁵⁾。規則づくめの演劇を「牢獄」のごとく感じていたゲーテがシェイクスピアに感激し、「自然、自然」と叫んだのもほぼ同じころである²⁶⁾。ズルツァーにとってカルシュは、まさしく自身の文藝理論の例証であり、応用問題であった²⁷⁾。

さて、カルシュは「ペロイーゼの閔歴」の末尾で、「王とその勇士の群れ」のために、そして輝かしい戦勝のために歌う詩人となったことを誇っている。カルシュにとってフリードリヒはつねに解放者であり、詩の題材であった。ゲーテの所見はよく知られている。

ドイツ文学にはじめて真の高い生命をもつ素材を提供したのがフリードリヒ大王と七年戦争の功業であった。いかなる国民文学も、人間として第一級の人物によりどころを得、国民とその指導者たちが手を携えてその一人の人物に味方したときのできごとによりどころを求めなくては、かならずや底の浅い作品であり、そういうものになるほかはない。[……] プロイセン国民およびドイツのプロテスタント地域はみずからの文学にふさわしい宝物を獲得したのであるが、そういうものが対立陣営には欠けており、この不足はあとからどんなに努力しても補えなかった。プロイセンの作家は自分たちの国王を偉大な存在として感じ取ることを許され、それを糧としてはじめておのが力量を鍛え上げていったのである [……]。²⁸⁾

カルシュもまたこうしてプロイセンの詩人となった。が、折節フリードリヒを称える讃歌、その時どきの戦勝を記念する歌とは、すなわち「機縁詩 Gelegenheitsgedichte」である。フリードリヒ・ヴィルヘルム一世このかたベルリンでは宮廷詩人が姿を消したが、バロックの伝統を引き継ぐ機縁詩はなお需要があり、だれしも詩によって称えられることを願った。カルシュは大王の事績や七年戦争の勝ち戦を歌うだけでなく、貴族や大商人などの慶弔の機会をとらえ、ときには即興で詩をつくるのが得意だった。モーゼス・メンデルスゾーンが舌を巻いたトルガウの戦勝歌など、いくつかの傑作もそのなかから生まれた。「すべての詩節が同じ強さをもつ

ているわけではないが、いくつかの詩節からは、男性的な、ほんとど荒々しい空想が輝きを放っている。並外れた天才を証明するものであることはまぎれもない。[……] 戦争に行ったことのない婦人がどうしてこのような表現に到達しえたのか、わたしには理解できない²⁹⁾。

しかしカルシュが機縁詩を得意としたという事実は、文学史のうえからもカルシュの力量からみても問題がないわけではない。すでにバロック末期のシュレージエンの詩人のなかから、機縁詩を問題視し、ドイツ文学の成長にとって好ましくないジャンルだと警告する発言が聞かれた³⁰⁾。桂冠詩人の夢が破れて早死にしたギンターは、機縁詩が古いジャンルになりはじめた過渡期の詩人であろう³¹⁾。が、このジャンルを最後までカルシュは捨てなかった。

カルシュは詩法を、いや、そもそもドイツ語の綴り方や句読法さえ学習したことがない。

王はお尋ねになりました、そちに歌を教えたのはだれか、
アポローンの弦の運びを伝授したのはだれか、と。
英雄であらせられる王よ、と申しました、自然と王のご戦勝が
技藝なくしてわたしを詩人にしたのです、と。³²⁾

だが、規則はだれに教わったのだ。
規則と申しまして、なにも存じません。/
なにも知らん。そのようなことはありえぬ。だが、韻律は知っているであろうな。
はい陛下。ただ、韻律は耳で聞いたものを守っております。それを韻律と申してよいかどうか
わかりません。

ことばを習ったことのない者が、いったいどうやってことばをきちんと処理するのかね。
母国語は存分にあやつれます。
たしかにそうであろうが、洗練という点ではどうかな、文法はどうしているのかね。
文法につきましては、ほんの少し間違えるだけだと、失礼ながら申し上げてよいかと存じます。
だが、文法を間違えてはなるまい。(王はお笑いになりました。)³³⁾

正直な告白である。

無教育のカルシュが、ドイツ語の綴り方を間違え、句読法を粗略に扱い、文法に違反し、疑問符も感嘆符も知らなかったのは無理もないことだ。本人もそのことをよく自覚していた。しかしそれとは裏腹に、いわば天才的なひらめき、即興の能力には秀でていた。おそるべき集中力は周囲の人々を感嘆させた。晩年、グライムにこう告白している。

幸運にも満足のいく生活ができるようにと祈ってくださいますが、よい友人にめぐまれましたので満足しております。机に向かい書をひもとくときには満足しております。けれども食べていく心配から真夜中を過ぎると目がさめてしまいます。[……] 機縁詩はもちろん名誉なことではありませんが、家計の助けにはなります。³⁴⁾

機縁をとらえて創作するのは、あまり詩人の名誉になることではありませんが、パンを運んでくれます。³⁵⁾

強引な比喩、神話モチーフの濫用、論理の飛躍なども含め、少々粗雑な書法であったとしても、そこに輝かしい詩句が散りばめられ、詩の受取人を有頂天にさせるなら、機縁詩にもそれなりの需要があり、家計の助けにはなる。貧乏のどん底にあったころの惨めな記憶は、おそらく終生カルシュの脳裏を去らなかつたであろう。とにかく生きなければならない。折しもプロイセンは日の出の勢いである。カルシュの成功への道はプロイセンの隆盛と並行している。愛国詩人ならなんとか食べていける時代だった。

ドイツではじめて自立しえた女流詩人だというのがカルシュに与えられた名誉ある評価の一つである。しかし『精選詩集』編纂の過程で、それを企画した男たちは困惑した。添削をほどこさなければ本にならないことを見て取ったからである。ズルツァーはボードマーに、「カルシュは現在ベルリンにあって、一から十までわたしの指導を受けています」と書き、彼女が「どんな対象についてもひじょうに繊細な着想を産み出し、ひじょうにすぐれた詩にして朗読することなど難なくやっけてのける」のは事実なのだが、「今はあまりにも気が散っているため、ここでは詩を彫琢することができない」と評した³⁶⁾。引っぱりだこの人気作家が気分散漫になるのは無理もないが、そもそもそれは機縁詩と即興詩の本質に触れる問題でもある。ラムラーはやや皮肉な口調で、カルシュが大王から年金の約束をとりつけたことに言及し、生活の心配がなくなり即興詩にうつつを抜かす必要がなくなるのはいいことだと述べている³⁷⁾。

では、おのが弱点を認識し、ズルツァーの指導を受けたとされるカルシュのほうは、男たちの指導、添削をどう考えていたのであろうか。『精選詩集』出版後にカルシュはこう書いている。

ようやく [……] 最新文学書簡の書評を読みました [……]。批判のなかにほめことばも混じっていました。なかでも、わたしの詩には敬神と美德の痕跡があふれている、読者に徳を愛する心を注ぎ入れる特殊な才能がわたしにはある、などと書いてありますが、思うにこれはわたしが頂戴した最高のほめことばです。炯眼の方々がおっしゃるとおりだとしても、わたしには過分な批評です。[……] この雑誌はすでにお読みにになりましたか。しかしそもそもわたしの友人たちにだけ憤慨しているようにみえるのが、おわかりになりましたか。みんなしてわたしをほめつづけたからです。[……] このような判決に怒ってなどいませんが、予期せぬものではありました。わたしはリヒトヴェーアではありません。ラムラーやほかの方がわたしの歌に、リヒトヴェーアの寓話と同じ処置をほどこされても腹を立てはしないでしょう [……]。³⁸⁾

わたしは推敲添削していただいても構いません、とカルシュは開き直り、わたしへの称讃を難ずる向きもあるようだが、むしろありがたいと思っている、というのである。

言及されている『最新文学書簡』は、第272、第273書簡（1764年）にメンデルスゾーンのカルシュ批評を掲載した³⁹⁾。かつてメンデルスゾーンはトルガウの戦勝歌を絶讃し、カルシュに世人の注目を集めるきっかけをつくったのだが、ここではもてはやす風潮をたしなめ、それがむしろカルシュの成長を阻害すると釘を刺している。「良質な土壌はなるほどいたいけな植物

の最初の成長をうながすのに有利だが、やはり注意深く世話をして、発育異常や、降りかかるその他の危険から守ってやらねばならない。カルシュ夫人の天才になお若干陶冶が不可欠であることに」読者は気づくべきだ。しかし「作品に磨きをかけるにしても、この詩人には批評眼か忍耐かが、もしくはその両方がなお不足しているにちがいない」。彼女に「巧みな表現法、熱い想像力、穏当な道徳的判断、並外れた詩作能力が具わっている」のは事実だが、周囲の熱狂はむしろそれを損なっている。「まるでホメーロス、シェイクスピア、クロプシュトックなど、古今の詩人の藝術が、まあなんとかがまんのできる思いつきを、ただ押韻や韻律にあてはめるだけのものであるかのような言いぐさだ。そしてカルシュ夫人もそういう藝当ができる以上、ホメーロス、ホラーティウス、ルソーなどの頌歌も即興で書かれたのだから、これらの詩人を凌駕するには、上手な即興詩をつくりさえすればいい、とでも言うのであろうか。[……] こうした友人たちの軽率な熱意は、当然のことながら夫人を益するよりむしろ害する」のである。カルシュに「おのれの力量がいかほどのものかを教え、現時点で詩人たちの列に占める自分の位置を示し、完璧からなおほど遠いことをつねに感じてもらえるよう、努力して到達しうる目標がどのようなものかを悟らせるほうがよほど親切」ではないか。

詩を書くことにばかりかまけず、もっと吟味し、できるだけ機会をとらえて、われわれがどの文学ジャンルにでももっている偉大な模範と自分とを比較し、読者の前で震えることを夫人に教示しておくべきであった。[……] どんな行きすぎたお世辞よりも夫人には有益であったはずだ。当然のことだが、お世辞など言っても、完璧を目指す夫人の歩みを阻害するだけだ。[……] 読者は著者がだれか、それはどのような境遇の人物か、などといったことを忘れているであろう。国王か、女性か、ユダヤ人か、そんなことはいま問題になっていることとなんの関係もない。作家たる名誉を欲する者は[……] とにかく作家として評価されるしかない。情け容赦ない裁き手は当人の名望など無視して本質だけを見る。約束されたものが大きければ、そして作品にたいする称讃の声が高ければ、まちががなく判定はそれだけ厳格になるであろう。読者の期待が大きいほど、読者を満足させることもつねにそれに見合っつてむつかしいものだ。この一般的な所見だけでも、われわれの詩人の友人たちに、多くの点で読者の温情を必要とした作品を、これほど大騒ぎして世に送り出すのをやめさせるべきであった。

詩人には錬磨と成熟の時間が必要であり、機縁詩のみごとなできばえに満足してはならない、読者もその時間を待たなければならない、とカルシュの神話化を牽制したのが、モーゼス・メンデルスゾーンであった。

ヘルダーはカルシュが「ドイツのサッポー」と呼ばれていることに疑義をとえ、カルシュの詩には「全体に計画がなく、比喩を儉約しない。抒情的な反復も知らず、豊富な詩的想像力のおもむくがままに書きなぐったような産物」だと酷評した。「この程度の配列と火と美しい響きなら、もうこの分野でサッポーと張り合うのはおやめなさい」。そもそもサッポーの詩が「批評の賤金づくりどもの情け容赦ない毀損にさらされた」ように、「作者自身はそうしなく

ても、藝術批評家たちがカルシュ詩集を好きほうだいにするのは目にみえている」⁴⁰⁾。ヘルダーはカルシュの作品の本質にある即興性の弱点をすどくつき、彼女を天才ともてはやしギリシアの歌姫になぞらえる取り巻きたちの過大な評価を憂えた。

しかしカルシュの没後に出版されたカロリーネ版『詩集』第二版（1797年）への批評には、ヘルダーのどちらかといえば温かいまなざしが感じられる⁴¹⁾。かくも粗野な土地で生き育ち、好奇の目で見られ、ただほめる一辺倒の空気につつまれていたカルシュが、詩人として一頭地を抜く存在となりえなかったのは当然である。ぜひこの伝記を読んでもらいたい。称讃を惜しまぬ友人たちの鼓舞のおかげで、カルシュは実際以上の水準にまで引き上げられた。ただし、「自分だけを頼りにしつづけ、それどころか自画自賛し、自慢ばかりするようになったとき墜落した」。カルシュの自然感覚は少女時代と青春時代とに胚胎し、多くの詩は人生の思い出を綴ったものだ。「もしかすると宗教と自然と人間生活におけるさまざまな対象へのこの詩人の純粋な民衆感情を、心から出た強い響きで歌った二つの詩集のなかのえり抜きの作品」に読者が敬意を表するなら、カルシュは独自の地位を得、その名は永遠の命を獲得するだろう。「詩神のたまものは人それぞれ」だとすれば、カルシュを的確に評価し、ドイツ文学史に固有な地位を割り当てるべきであり、古代の詩人をカルシュに無理やり当てはめるのは好ましくない。「この想念の大胆な飛躍、甘美な狂気、いちいち感激しやすい性質、そしてとりわけ抒情文学のいとなみこそ、神々がカルシュに授けた個性あふれる贈り物だ」。ヘルダーはさらに、カロリーネ版に続く二冊目の遺作詩集が出版されることへの希望を語っている。このように、ヘルダーもまた天才だとほめそやす取り巻きを批判し、文化に見放されたような境涯から身を起こしたカルシュが、生きるための方便として機縁詩に傾斜したことに理解を示し、そのうえで長所を客観的に評価すべきことを冷静に訴えた。

カルシュは教養の不足から生じる作品の欠陥をおそらくは痛切に認識していた。しかも貧乏生活からの脱出はカルシュの至上命題であった。しかし自然のたまものとしての天才という宣伝は機縁詩の即興性とうまく調和し、多少の瑕疵を許容した。そのうえ、興隆への道をひた走るプロイセンの偉大な国王を称えるのは金になり、自身の悲惨な生活史が読者の好奇心をくすぐることもよく知っていた。「わたしの教育がどんなものだったか、わたしがどんなふうにして詩人となったか、それを読者に直接伝える必要を感じる」とカルシュは語っている⁴²⁾。カルシュが自然の子であり天才であるために、皮肉にも、むしろその悲惨な生い立ちがうってつけの前提となった。ズルツァーにとってもグライムにとっても、カルシュは自分たちの天才讃美を実証するうえでまことに好都合な実話であった。カルシュ自身も「神話化」によってその名を高からしめた。利害一致の戦略である。しかし、それと並行してカルシュの脱神話化も進め

られたことは、上に述べたとおりである。

カルシュの詩の価値を認めていたクロプシュトックは、1769年9月2日、グライムに宛ててつぎのように書き送った。

カルシュ夫人の最上の作品が散佚しないように配慮してください。ただし、本人ができるかどうかは別にして、それらに手を加えさせねばなりません。絶え間のない称讃のことばの多くは消えねばなりません。⁴³⁾

クロプシュトックもまた建設的な炯眼の批評家であった。

注

- 1) Alfred Anger, Nachwort. In: Anna Louisa Karschin, *Gedichte und Lebenszeugnisse*. Hg. v. A. Anger [Universal-Bibliothek Nr. 8374]. Stuttgart 1987. S. 197.
- 2) *Gedichte* von Anna Louisa Karschin, geb. Dürbach. Nach der Dichterin Tode nebst ihrem Lebenslauff hg. v. ihrer Tochter C. L. v. Kl [Caroline Luise von Klencke]; geb. Karschin. Nachdruck der Ausg. Berlin 1792. Mit einem Nachwort v. Barbara Becker-Cantarino. Karben 1996. S. 197 f.
- 3) Barbara Becker-Cantarino, „Belloisens Lebenslauf“. Zu Dichtung und Autobiographie bei Anna Louisa Karsch. In: *Gesellige Vernunft. Zur Kultur der literarischen Aufklärung*. Festschrift für Wolfram Mauser zum 65. Geburtstag. Hg. v. Ortrud Gutjahr u. a. Würzburg 1993. S. 13-22, hier: S. 16. これは「ペロイーゼの閲歴」を扱ったほとんど唯一の論文である。
- 4) Vgl. Winfried Freund, *Abenteuer Barock. Kultur im Zeitalter der Entdeckung*. Darmstadt 2004. S. 48 ff., 97 ff. u. 190 ff.
- 5) An Gleim, 15. Aug. 1763. In: „*Mein Bruder in Apoll*“. *Briefwechsel zwischen Anna Louisa Karsch und Johann Wilhelm Gleim*. Hg. v. Regina Nörtemann. Bd. I: Briefwechsel 1761-1768. Göttingen 1996. S. 184.
- 6) An Palemon, an ihrem Geburtstage. Den Iten des Christmonaths 1761. In: *Auserlesene Gedichte* von Anna Louisa Karschin. Nachdruck der Ausg. Berlin 1764 (recte 1763). Mit einem Vorwort v. Barbara Becker-Cantarino. Karben 1996. S. 217-220.
- 7) Vgl. *Die Karchin. Friedrichs des Großen Volksdichterin. Ein Leben in Briefen*. Eingeleitet u. hg. v. Elisabeth Hausmann. Frankfurt a. M. 1933. S. 35.
- 8) ベカー = カントリーノはここにカルシュの社会批判を読み取る (Barbara Becker-Cantarino, a. a. O. [wie Anm. 3] S. 18.) が、同意できない。二度の結婚生活ともきわめて不幸であったのは事実だが、妻・主婦・母となることは長く庶民の女の目指すべき人生の目標であり、カルシュも例外ではなかったからである。むしろカルシュは古い婚姻観にしばられていた。最初の夫ヒルゼコルンは強引な手口でアンナと離婚し、再婚後、息子をもうけた。カルシュはその子の生活苦を見るに見かねて援助の手をさしのべたが、「この子の父親はかつてわたしの所有者だったからです」(an

- Gleim, 3. Okt. 1770: *Die Karschin* [wie Anm. 7], S. 264) と、その理由を説明している。ヒルゼコルンは札状をよこした (ebda., S. 40)。妻・主婦・母の問題については、佐藤正樹「マダム・ビュルガーの運命——憂鬱な詩人の生活史より」(『文学』第10巻・第3号、1999年、岩波書店、S. 211-223) を参照されたい。
- 9) „*Mein Bruder in Apoll*“ Bd. I (wie Anm. 5), S. 344 f. なお、これら4通の自伝書簡 (同書 S. 342-363) の日付はズルツァーが記入したもので、信用できない。はじめの3通は1761年秋に、4通目は1762年9月初旬に書かれたものと推定されている。
 - 10) An Sophie Dorothea Gleim, 30. Okt. 1761: „*Mein Bruder in Apoll*“, Bd. I, S. 377.
 - 11) An Gleim, 9. Mai 1762: ebda., S. 105 f.
 - 12) An Gleim, 18. Mai 1762: *Die Karschin*, S. 153; vgl. ebda., S. 25.
 - 13) *Auserlesene Gedichte* (1763), S. XIV f.
 - 14) *Deutschlands Schriftstellerinnen von Samuel Baur* (1790). Als Nachdruck hg. u. mit einer Einleitung versehen v. Uta Sadji [Stuttgarter Arbeiten zur Germanistik, hg. v. Ulrich Müller u. a. Nr. 194]. Stuttgart 1990. S. 42. 多作であったパウアの執筆方法とその時代背景、本書の意義については、編者の解説 (とくに S. 4-7) を参照されたい。
 - 15) An Gleim, 29. Sept. 1763: „*Mein Bruder in Apoll*“, Bd. I, S. 186.
 - 16) Vorläufige Lebensbeschreibung der Dichterin Anne Luise Karschin, geb. Dürbach. In: *Berlinischer Musenalmanach von 1792*, hg. v. Karl Heinrich Jördens. Hier zit. nach: *Anna Louisa Karsch (1722-1791). Dichterin für Liebe, Brot und Vaterland*. Ausstellung zum 200. Todestag. Staatsbibliothek Preußischer Kulturbesitz. Konzeption der Ausstellung: Gisela Staupe u. a. Berlin 1991. S. 25.
 - 17) *Die Karschin*, S. 348-351.
 - 18) Johanna Louise Rebelt an Gleim, 22. Okt. 1791: ebda., S. 383-385.
 - 19) Vorberichtender Lebenslauf der Dichterin Anna Louise Karschin, geb. Dürbach. In: *Gedichte* (1792) (wie Anm. 2), S. 12 f. カルシュは自身と例の牧童の醜さを強調しているが、シュラファーは、自然の子とその成功のゆえんがここにあるのだというメッセージを読み取っている (Hannelore Schläffer, *Naturpoesie im Zeitalter der Aufklärung. Anna Luisa Karsch (1722-1791). Ein Portrait*. In: *Deutsche Literatur von Frauen*. Hg. v. Gisela Brinker-Gabler. 1. Bd: *Vom Mittelalter bis zum Ende des 18. Jahrhunderts*. München 1988. S. 313-324, hier: S. 317)。
 - 20) Ebda., S. 23 f.
 - 21) Sulzer an Bodmer, März 1761: *Die Karschin*, S. 74.
 - 22) An Gleim, 28. März 1762: „*Mein Bruder in Apoll*“, Bd. I, S. 92.
 - 23) Christoph Martin Wieland, *Schriften zur deutschen Sprache und Literatur*. Hg. v. Jan Philipp Reemtsma u. a. Frankfurt a. M. u. Leipzig 2005. Bd. III, S. 57.
 - 24) Sulzers Vorrede zu *Auserlesenen Gedichten*, S. VII-IX u. XI f.
 - 25) *Allgemeine Theorie der Schönen Künste in einzeln, nach alphabetischer Ordnung der Kunstwörter auf einander folgenden, Artikeln abgehaldelt*, von Johann Georg Sulzer. Leipzig 1771/1774. Artikel „Genie“. Zit. nach: Digitale Bibliothek Bd. 67. Berlin o. J.

- 26) Goethe, *Zum Shakespeares Tag* (1771). Zit. nach: *Goethes Werke*. Hg. im Auftrage der Großherzogin Sophie von Sachsen. 37. Bd. Weimar 1896. S. 133.
- 27) Vgl. Hannelore Schlaffer, a. a. O. [wie Anm. 19], S. 315.
- 28) Goethe, *Dichtung und Wahrheit*, 2. Theil, 7. Buch. Zit. nach: *Goethes Werke*. Hg. im Auftrage der Großherzogin Sophie von Sachsen. 27. Bd. Weimar 1889. S. 104 f.
- 29) *Die Karschin*, S. 73. Vgl. „*Den 3ten November 1760. groß durch den Sieg des Königs bey Torgau* [...]. Glogau, 1760“, in: A. L. Karschin, *Gedichte und Lebenszeugnisse* [wie Anm. 1], S. 162.
- 30) たとえばベンヤミン・ノイキルヒ。Vgl. *Die Gegner der zweiten schlesischen Schule*. 2. Teil. Hg. v. Ludwig Fulda [Deutsche National-Litteratur. Hist.-krit. Ausg., hg. v. Joseph Kürschner. 39. Bd.]. Berlin u. Stuttgart o. J. S. 452 und 479 ff. („Auf unverständige Poeten“).
- 31) Vgl. Wolfgang von Ungern-Sternberg, *Die Armut des Poeten. Zur Berufsproblematik des Dichters im frühen 18. Jahrhundert am Beispiel von Johann Christian Günther*. In: *Text + Kritik*. Zeitschrift für Literatur. Hg. v. Heinz Ludwig Arnold. Heft 74/75: *Johann Christian Günther*. München 1982. S. 85-109.
- 32) Antwort der Dichterin. *Geschichte der Unterredung mit dem Philosophen zu Sanssouci*, V. 44-47. In: *Gedichte* (1792), S. 185.
- 33) An Gleim, 15. Aug. 1763: „*Mein Bruder in Apoll*“, Bd. I, S. 184.
- 34) An Gleim, 28. Juli 1789: *Die Karschin*, S. 361.
- 35) An Gleim, ohne Datum: ebda., S. 374.
- 36) s. Anm. 21; hier: S. 74 f.
- 37) Ramler an Gleim (1763?): *Die Karschin*, S. 200.
- 38) An Gleim, 3. Aug. 1764: „*Mein Bruder in Apoll*“, Bd. I, S. 222 f. カルル・ヴィルヘルム・ラムラーがマグヌス・ゴットフリート・リヒトヴェーアの『寓話と小説』を、作者の諒解を得ないまま編集して出版した(2巻、1761年)ことから、両者のあいだにいさかいが生じた(vgl. ebda., S. 451)。
- 39) Moses Mendelssohn, *Briefe, die Neueste Litteratur betreffend*. 272. u. 273. Brief. Zit. nach: *O, mir entwischt nicht was die Menschen fühlen. Gedichte und Briefe von Anna Louisa Karschin*. Hg. u. mit einem Nachwort v. Gerhard Wolf [Märkischer Dichtergarten 5109]. Berlin 1981. S. 239-245.
- 40) Herder, *Sappho und Karschin* (1767). Zit. nach: Johann Gottfried Herder, *Sämmtliche Werke*. Hg. v. Bernhard Suphan. 1. Bd. Berlin 1877. S. 350-352.
- 41) Herder, *Gedichte von Anna Louisa Karschin, geb. Dürbach*. [...] (1797). Zit. nach: J. G. Herder, *Sämmtliche Werke*. Hg. v. Bernhard Suphan. 20. Bd. Berlin 1880. S. 269-274 u. 276.
- 42) An Gleim, 29. Sept. 1763: „*Mein Bruder in Apoll*“, Bd. I, S. 186.
- 43) Klopstock an Gleim, 2. Sept. 1769: Friedrich Gottlieb Klopstock, *Ausgewählte Werke*. Hg. v. Karl August Schleiden. Nachwort v. Friedrich Georg Jünger. München o. J. S. 1163.

Mythologisierung und Entmythologisierung der Karschin

SATO Masaki

Anna Louisa Karsch's 46zeiliges Gedicht „Belloisens Lebenslauf“ ist eine der seit 1761 geschriebenen sechs einigermaßen geschlossenen (Auto)biographien der Dichterin. Dieses Gedicht enthält einige „mythologische“ Elemente, obwohl sie für dieses knappe Gedicht nur wenige besonders bedeutsame „wirkliche“ Erlebnisse sorgfältig ausgewählt haben muss, denn die Gunst der Musen sei der Dichterin schon „vor dem Geburt“ versprochen gewesen. Karsch wurde als eine Dichterin von Natur aus, das Kind der Natur, ja, als ein Genie angepriesen und zugleich auch als ein lebendiges Beispiel der These genommen, ein Genie könne nicht durch Erziehung und Regeln gebildet werden.

Die Dichterin hat die Begegnung mit einem Rinderhirten während des Viehhütens zwar nicht ins Gedicht aufgenommen, aber dieses Ereigniss tritt in allen anderen fünf (Auto)biographien auf und verstärkt den Trend der Mythologisierung der Dichterin. Eines Tages, als sie drei Kühe trieb, sah sie jenseits des Baches einen Hirtenknaben anderen Schäfern ein Buch vorlesen, ein Buch als Sinnbild der Kultur bzw. aufgeklärten Menschen.

Diese Szene verwandelt sich aber in einem Entwurf der Autobiographie von 1789 in die Buchvorlesung vor den rings um ihn stehenden Rindern, und zuletzt in der großen Biographie, die von der Tochter Karoline als Einführung in die Gedichtsammlung ihrer Mutter (1792) abgefasst wurde, geht es darum, dass sich das Mädchen unter der Führung einer davonlaufenden Kuh, einer Gotteskuh, unerwartet in eine unbekannte Weide findet: ein Paradies in Barockmanier. Hier sind Gott, Natur und Genie als ein Satz Begriffe vorgestellt.

Trotz der Aufklärungsprogramme hatte Karsch zeitlebens keine Gelegenheit, zur Schule zu gehen, geschweige denn eine Poetik zu erlernen. Nun schrieb sie wohl eine Menge Gelegenheitsgedichte, die hoch im Kurs standen, aber die Dichterin, die als Wunderkind gepriesen wurde, konnte kein „richtiges“ Deutsch schreiben. Moses Mendelssohn und Herder warnten vor diesem Geniekult eben deshalb ernst, weil sie viele Vorzüge der Dichterin und deren Werke hoch schätzten. Sie sprachen dem Publikum zu, man solle mit Geduld warten, bis sie sich in Dichten geübt und zur reifen Dichterin werde. Andererseits rieten sie der Dichterin, sie solle lernen, vor großen literarischen Leistungen der Vergangenheit demütig zu sein, und solle auch ihre Zeit und Gabe für die Dichtkunst nicht vergeuden.